ミュージアム発足から携わってきて今思うこと（後半）

天岸祥光

（前半：ミュージアム開設前４年間に重要な働きをした県職員２名、小室氏と池谷理事、それに東大の洪特任教授の計３人について述べ、当初は NPO の存在を無視し、ミュージアム基本構想に沿った運営には程遠いと思えた初代安田館長についても述べた：86 号 P3。）

開館６年後に次期館長として佐藤洋一郎先生が赴任されました。

以前静岡大学にもいらしたので存じ上げていましたが、今や米文化、和食文化方面などの第一人者で、ミュージアム館長としても最適な人事でした。我々ももろ手を挙げて喜びましたが、ただ京都の大学での教育が終わっていないため、ミュージアムには月１，２回しかいらっしゃらないので、十分な話はすぐにはできませんでしたが、それでも NPO 事務室にもすぐに顔を出してくださって、我々がいかにミュージアムの研究者の皆さんと一緒に仕事をやっていきたいかをくみ取っていただきました。

これでやっとミュージアムがスタートラインに立てる、仕切り直しだ！と私などはやや力んでしまった感がありますが、NPO の皆さん、特に副理事長の三宅さんの顔つきもやっと穏やかになってきました。

佐藤先生赴任３年後には全面的に静岡在住が可能になり、さっそく令和５年からミュージアムの館長、研究者、職員の皆さんと我々 NPO のメンバーとの話し合いの場である「連絡会」が年に何回か持てるようになりました（どちらも自由参加）。

兎に角、館長のいる前での発言は、いない場合とは雲泥の差があるので、初めは我々 NPO のこれまで溜まっていた不満の発言が爆発していましたが、最近は落ち着いてきて、この連絡会の下に、ミュージアム側と NPO 側の代表が集まって「データーベースのためのソフトウェアの構築」、「コレクッションポリシー草案」の検討に入ったところです（発足して９年経ってもまだこんな基礎的なことが決まっていないのは異常ですが）。

このコレクションポリシーは収集すべき資料の方向性を示す極めて重要なミュージアムとしての根幹をなすものですが、同時にその方向性に準じた研究員の人事も行われなければなりません。

昨年度の「イネ・米・田んぼ」という企画展での私の講演後の佐藤館長との対談風景

年一回行われてきた運営協議会において、佐藤館長になってから私は研究員の採用方針について苦言を呈してきました。佐藤館長なら聞いてもらえると判断したからです。それは安田館長の下ではとにかく研究業績一辺倒で募集・採用をしてきたので、集まってきた初めの研究員の皆さんはそういう意味では優秀でしたが、私も長い間大学に従事していたのでよく分かるのですが、初めに採用された研究員の何人かはミュージアムで一旦身分を安定させ（何しろミュージアムの研究員はパーマネント・ジョブですから）、以前の大学なり研究所の同僚と共著の論文を書き、科学研究費も共同で申請し次のしかるべき職場を虎視眈々と狙い、2，３年で移っていくタイプで、実際何人かはそれに準ずる研究者でした。つまりこのミュージアムで生きていこうという情熱のかけらもないことは明白で、当時の安田館長も他大学に移っていく研究員をこのミュージアムで育てたとむしろ鼻を高くしていたようでした。こういう人事ではだめだ、採用面接の時もっとしっかりミュージアムにどのくらい情熱を持っているか確かめなくては、という私の意見を佐藤館長は「その通り」と大賛成してくれ、そのためには個々の研究員の研究テーマの方向性だけでなく、ミュージアム全体の方向性も定めなければだめだと仰って、それがコレクションポリシーにも繋がりました。ミュージアムはこれからです！